

柏亭本『うつほ物語』(広島大学蔵)の特色(その二)

——俊蔭卷本文の前田家本との比較を中心に——

猪 川 優 子

はじめに——柏亭本『うつほ物語』について

広島大学附属中央図書館は柏亭得一斎醜哉(柏村真直)筆による『うつほ物語』二十冊(以下、柏亭本とよぶ)を蔵している。最近、関係者の方々のご厚意により、柏亭本を調査する機会を得たので、ここに調査報告を記したいと思う。なお今回の報告は、紙面の関係上、第一冊俊蔭卷の書誌および内容に限ることにする。

柏亭本については、早く中村忠行氏⁽¹⁾が簡単な解説を書かれ、また、吉山裕樹氏⁽²⁾が本誌に調査報告を書かれている。拙稿は、両氏のものに補足する形となるので、あわせて御覧いただきたい。

書誌に関しては、中村氏の解説(吉山氏も同解説をそのまま引用)で紹介された部分は割愛し、ここでは若干の補足と訂正のみを記す。保存は綴糸の補修と虫損が少々あるものの良好といえる。表紙は無地・藍色、左肩に「うつほ物語⁽³⁾」と墨書した題簽を貼る。料紙は格紙、見返しは前後とも本文共紙である。前見返しが剥離し、剥

離側に「うつほ物語／第一としかけ」と墨書。後見返しは反古紙を用いており、墨付部分は表からは見えないが、一瞥したところ練習用の紙を裏返して袋綴にしたものかと思われる(袋綴外側には「すまひのほんで(以下判読不明)」、内側には忠こそ巻の冒頭部分が十三行書で書写されている)。巻首扉部分の書入れは中村氏によって紹介されているが、一部訂正があるので以下にその全文を記しておく。

宇津保物語 全部二十冊

里村昌純自筆の本をもて

柏亭得一斎醜哉

うつし畢

外題は

風早宰相実積御筆也

丁数は七十三丁(前見返し剥離の一丁を除く)、その内墨付き七十丁、白紙第一丁ウ・巻末一・五丁。背に「うつほ物語」と墨書されている。紙面は九行書で墨の書入れがあり、本文冒頭頁左肩の余白に「第一としかけ」と墨書されている。

ここで書写年代についての私見を記す。広島大学附属中央図書館は、同じく真直の自筆本とされる『落窪物語』四冊を蔵しており、その奥書には延享三(一七四六)年と記されている。これを参考にする、『うつほ物語』の書写も、中村氏が解説の中で近世末期としておられるよりも少し遡る可能性がある。また新たな問題として、吉山氏が指摘された柏亭本と無窮会本との近接関係からも書写年代

を考える必要がある。中村氏は前掲解説に示された系統表において、柏亭本を無窮会本に遡るものとして位置付けられている。しかし無窮会本は、近世初期の書写と推定されている。また無窮会本には、圖書寮無識語本（前田家本と密接な関係を持ち、書写年代もほぼ同時代であるとされる）との近接関係も指摘されており、書写年代については今後諸本の相互関係とともに慎重に考えたい。

和歌に関しては、室城秀之氏が前田家本の和歌の表記法について言及された視点に沿ってみていくことにする。柏亭本の和歌はすべて改行して約二字下げで書かれており、前田家本と同様本文と區別する形をとっている。室城氏は前田家本の和歌を、一行におさめる（一行型）、一行で書き切れない場合に次の行の行頭へ続けて二行にまたがらせて書き、続く本文は次の行の行頭から書く（二行断絶型）、二行にまたがらせて書き、和歌に続く本文を二行目の和歌の後に続けて書く（二行連続型）の三通りに分け、俊蔭巻では（一行型）が一九首、（二行連続型）が一首とされている。柏亭本では、（一行型）が一七首、（二行連続型）が二首（第一三番歌・第一六番歌）みとめられる。前田家本の（二行連続型）の一首は第九番歌なので一致しないが、全体として（一行型）が多いのは同じである。室城氏は、前田家本では巻によって和歌の表記法が異なると述べておられるので、今後柏亭本においても注意してみたい。

以上、柏亭本『うつほ物語』俊蔭巻の書誌について、これまでに紹介されている内容に少し補足させていた。続いて俊蔭巻の

本文について、前田家本との異同を中心にみていく。

一 柏亭本と前田家本との異同

柏亭本と前田家本とを対校すると、かなりの異同がみられる。例えば漢字とかなの割合は、柏亭本は前田家本に比べて圧倒的に漢字の使用が多い。また、助詞や助動詞の使用、敬語の有無、活用形などの細部にまで目を配ると、異同は枚挙にいとまがない。そこで今回は、幾つかの視点に絞って異同の実態を紹介する。本文の引用に際しては、上段に柏亭本、下段に前田家本を配し、前田家本には頁と行数を括弧内に記した。また、必要に応じて※印をして注記した。

（一）前田家本にない語句が柏亭本に入る例

柏亭本には大きな独自本文はみられず、一単語から一文節程度加わるにとどまっている。次に例を挙げるが、紙面の関係上すべてを載せることは出来ない。任意に数例を挙げることにする。なお、異同部分に傍線を付し、必要に応じて句読点および鈎括弧を私に付した（以降の項目についても同様）。

・ ひたひをつとへて血の涙をおとして——ひたひをつとへて涙をおとして（二頁9行）

・ 大なる波にあひておほくのともからをほろぼして——おほいなる波にあひてともからをほろぼして（九頁10行）

・ さて有ましう殿にもおほしさはくらんと——さてもあるましうおほしさはくらむと（四三頁9行）

・あこはそこにねよ。ねふたからん」とて——あこはそこに。ねふたからむ」とて(九七頁6行)

・琴を前にをかせて——ことををかせ給て(一一九頁10行)

語句が加わることによって文脈が大きく変わるというのではなく、いくらか補足されるという意味合いを持つ。この他には此「いと」といった、語句自体があまり際立った意味を持たないものも存する。以上のような例は四〇箇所ほどみられる。

(2) 前田家本にある語句が柏亭本に入らない例

これは前項の倍近く該当箇所があり、二語以上の場合もある。次の例は、柏亭本における二語以上の脱落箇所である。

・日本の衆生三年つゝしみて功德の故に——日本の衆生三年つゝしみてかの仙人になつみ水くみせしくとくの故に(二二頁6行)

・親たちの無成にけるさはきにとりかつをかみにしてみなうせはてにけくなりけるさはきにとりかつをかみにしてみなうせはてにけり。(三四頁10行) ※『うつほ全』では傍線部を未詳とする。

・くひをも奉らん」と申ければ皆十人二十人とあかれて——くひをもたてまつらん」と申ければいとまたひてみな二十人とあかれて(四六頁7行)

・母あやしかりて「なとあこは此比ちはのまぬそ。猶のめ——はゝあやしかりて」なとあこは「このころちのはまぬ」といへはおや「なぞのめ(六〇頁3行) ※傍線部の前後の話者はどちらも母(俊蔭女)なので不審。

・いもところの在所も見えぬ時に——いもところのありところもこのみのあり所も見えぬ時に(六五頁4行)

・いと、有と有人愛まとひて御あこめ一重をぬきて——いと、ありとある人めてまとひて左大将のおと、ましてあはれかりめて給て御あこめ一かさねをぬきて(一一三頁6行)

ただ、前田家本のみ存する語句の中に、必ずしも妥当とは思えないものもある。例えば、前後の文脈に同じような語句が続く場合や、語句が入ることで文脈が乱れる場合などであり、以下に例を挙げる。

・せんたんの木の陰に——せんたむのきの木かけに(二五頁10行)

・そこにも同事の給ひて、六人つれて入給ふ。そこにも同事の給て、七人つれて入給。——そこにもおなしことの給て、同こと六人つれて入給。そこにもおなしことの給て、七人つれて入給。(一七頁4行)

・舞人陪従いかめしう数知す過給ふをみると——まい人へいしういかめしう御まへかすしらすすき給をみると(三六頁六行)

※俊蔭の家の前を過ぎていたので不審。
・いかめしう茂りて杜のことみゆる中に——いかめしうしけりてもりのことしけりてみゆるなかに(七七頁5行)

これらは誤写の可能性もあるが、『うつほ物語』全体の文体や語法からも考えなければならぬ問題であり、安易な判断はできない。その他、前項と同じように短い語句が加わる例を幾つか挙げる。

・もろこしに三度わたれるみはらの門人と云を召て——もろこし

に三たひわたれるはかせなりとみのかとひとゝいふをめして

(二頁二行)

・花の上には孔雀つれてあそふ所に——はなのうへには本の鳥孔雀つれてあそふ所に(二七頁8行)

・天の掟あらは国母ともなれ——天のをきてあらは国母婦女ともなれ(二二頁二行)

・白き髪すちも白かねと成なん——しろきかみのすちもしろかね

こかねとなりなむ(五四頁二行)

・此おやいさゝか物くふ事もなくなりぬ——このおやこいさゝかものくうこともなくなりぬ(六一頁一行)

前項とあわせて考えると、柏亭本よりも前田家本の方が語句の総数が多いことに気付く。語句の増減が諸本によってどう異なるのかということも、書写の過程を考える一つの視点であると思われる。

(3) 柏亭本と前田家本とで文の続き具合が異なる例

柏亭本と前田家本とでは、語句や文の切れ目が異なる箇所がみられる。まず、活用形の違いや接続助詞の有無によって文が切れるか連続するかの相違がある場合を挙げる。

・七人つれて入給ふ。その山の主を拝み給。——七人つれて入給で、その山のあるしをおかみ給。(一七頁9行)

・昔けんとんしやけんなる国王有て、国ほろひて諸の衆生国土の人こくにつかれし時^有き。——昔慳貪邪見なる国王^有りき。国ほろひてもろくのすしやう国土の人こくにつかれし時^有りき。

(二二頁3行) ※『うつほ全』「ありて、」。

・諸ともに舞あそふ。なかつみ舞て——もろともまいあそひ、なかつみまいて(一一四頁9行) ※『うつほ全』「遊ぶ。」

次に、語句の読み取り方の違いによって文脈が異なる例を挙げる。

・御馬を走うちて入給へは、飛に飛。——御馬をはしりうちていり給へは、とひにとふ。(七八頁一行) ※『うつほ全』「をば尻打ちて」。

・いみしうめてたき。凡人に聞みんたに在に——いみしうめてたきを、よそ人にきゝ見むたにあるに(八五頁4行)

これらは書写が重ねられる過程でかなに漢字があてられ、文脈が変化したものとみられる。次に会話文の位置付けが異なる例を挙げる。

・もし人も近く御物語やし給ひし——「いていさや、近き俵に蓬葎の陰を社はかたらへ」——もし人もちかく御ものかたりやし給し「いらへ」「いさや、ちかきまゝによもきむくらとこそはかたらへ」(五二頁7行)

・おとと、人々うち心して。我つかさのすけも恥かしき人そや。——おとと、人に「うち心してあれ。我つかさのすけもはつかしき人そや。(二〇七頁7行)

これらは、書写者の文脈理解が本文に影響を与えたものといえる。以上のように諸本によって文の続き具合が異なるのは、本文に句読点や鈎括弧がないことや、かなの持つ曖昧さが原因と思われる。

(4) 柏亭本と前田家本とで語句が異なる例

柏亭本と前田家本との間で語句が異なる箇所は、かなりの数にのぼる。そこで幾つかのまとまりに分け、特色をみていくこととする。

まず、同じ語句ではあるが、用字法が異なる例を挙げる。以下の

①から⑤については用例数を示し、必要に応じて私に濁点を付した。

①子音の相違（全六例）

・ かなしみ思遣べし——かなしびおもひやるべし（三頁8行）

※同様の異同が他に三例あり。

・ たうとみて——たうとびて（二頁10行）

・ 隣みの心——あはれびの心（七二頁10行）

柏亭本と前田家本との異同箇所のみに着目すると、両本の間にはマ行音とバ行音との相違がみられる。そこで、この三語について俊蔭卷の全用例を調査したところ次の表のようになった。（表中の「体」は動詞の連体形・「用」は動詞の連用形・「名」は名詞を表す。）

	マ行音			バ行音			総数
	体	用	名	体	用	名	
前田家本	1	0	0	0	3	4	8
柏亭本	1	2	4	0	1	0	8
			計			計	
			7			1	8

両本ともに一語ずつ乱れがあるが、柏亭本ではマ行音が、前田家本ではバ行音がほぼ通用されるといふ傾向がみられる。マ行音とバ行音との交替現象については、奈良時代から平安時代にかけてバ行からマ行への変化が起こり、院政期から鎌倉時代にかけてマ行からバ行への変化が起こるといふ松本宙氏^{（下）}の論がある。ここでどちらが古

形を残しているかということに関しては俄かに結論を出せないが、両本の特色の一つであるといえる。

②母音の相違（全五例）

・ おふしたつるに——おほしたつるに（二頁4行） ※同様の異同

が他に一例あり。

・ 河原に出て遊ありけば——かはらにいで、あそびあるけば（六

一頁5行） ※同様の異同が他に二例あり。

前者はu—oの相違、後者はi—uの相違である。ここで、後者について俊蔭卷の全用例を調べたところ、柏亭本は全二二例すべてが「アリク」で統一されているが、前田家本は三例が「アルク」（柏亭本との異同箇所）、残りの一九例が「アリク」となっており、統一がみられる。

③音便（全五例）

・ 大空かきくらがりて——おほぞらかいくらがりて（二頁5行）

・ 見入べうもあらず——みいるべくもあらず（三頁1行）

・ 恥かしうさへ有て——はづかしくさへありて（五三頁8行）

・ 口なうては——くちなくては（六七頁9行）

・ かどくしうめも及ず——かどくしくめもよばず（二〇二

頁5行）

初めの一例がイ音便、後の四例がウ音便である。前者については一例のみなので特色をいうことは出来ないが、後者については柏亭本の方がウ音便化が進んでいることがわかる。ただ、異同以外の箇所

では前田家本にもウ音便がみられ（はづかしう侍べき）（九三頁6行）など、完全に統一されているわけではない。

④文字の添加／脱落（全六例）

○「ウ」（全四例）

- ・ 琴引ぞたつべき人——琴ひきてぞうたつべき人（一四頁5行）
- ・ 御社にまうでつき給て——みやしるにまでつれ給て（三七頁10行） ※「うつほ全」詣で着き給ひて。
- ・ らたがりて——らうたがりて（六一頁11行）
- ・ さらばはやつとて——さらばやとて（七六頁10行）

○「ク」（全二例）

- ・ 眼を車のわのごとくみるべかして、牙を劍のごとくくひ出して——まなごをくるまのわのごとくみるべかして、はをづるぎのごとくくひだして（八頁二行） ※同様の異同他に一例あり
- ・ 「ウ」については、長音、ウ音便化、ウ音便無表記、誤写、別語など様々な可能性があり、また両本ともに混在しているため傾向は導き出せない。「ク」については、柏亭本はすべて「ごとく」であるが、前田家本では「ご」と「ご」と「ご」が混在している。

⑤拗音（全一例）

・ いふそく——いうしょく（一〇〇頁8行）

「有職」のかな表記は俊蔭巻にもう一例みられ、両本ともに「いふそく」で異同はない。しかし、前田家本におけるこの語句の表記はゆれており、他に「いふそく／いふそく／ゆうそく」がみられる。「い

うしょく」と拗音で表されるのは右の一例のみである。拗音の直音表記は中古の和文資料に多くみられるが、拗音表記も古くから皆無ではないとされ、確定しがたい。表記のゆれが書写を重ねることによって顕著になった例といえる。

続いて、同義や類義の語句であり、文脈上意味はあまり変わらぬものを取りあげる。まず、漢字をあてると同一文字になるが、両本で異なる読み方がされている例を挙げる。

・ 只今くらはんとする時に——たゞいまはさむとする時に（一一頁5行）〈食〉 ※「うつほ全」「食まむ」。

・ 蓮花の花園よりとてくれは——蓮花のはなぞのよりとてきたれば（一七頁11行）〈来〉

・ をのれらがいとけなきを——をのらがいとけなきを（一八頁4行）〈己等〉

・ 心苦しうおほして——こゝろぐるしうおもほして（四八頁2行）〈思〉 ※「おほす／おもほす」の例は他に三例みられ、「おほゆ／おもほゆ」も一例みられる。

・ 青つゞらを大なるかごにくみて——あおつゞらを大なるごにくみて（七四頁8行）〈籠〉

次に、類義の語句の中でも音が似通っている例を挙げる。

・ 生たゝんやうを見んとて——おいでむやうをみむとて（二頁3行）

・ 蓬葎さへ生ひろりて——よもぎむぐらさへおひひろりて（三三五

頁9行) ※『うつほ全』「生ひ凝りて」。

・御たい松ともして——御さいまつともして(一一四頁9行)

これらは、誤写などを経て同じ語句から一部変化したものと思われる。また、意味の上ではあまり変化がないが、全く別語になっている例がみられる。

・七の山に七人の人有り——七の山になつた人ありて(一五頁9行)

・ゆめさらく人に見せ給な——ゆめたふく人にみせ給な(三三頁11行)

・女君はことになやむ事なくて——君はことになやむところなくて(五六頁2行)

・天にもつか地にもつかず——そらにもつかず地にもつかず(七頁2行)

・大将はいみしき山をは五こえて——大将はいみしきおをいつ、こつて(七八頁10行)

またこの他に、次のように語順が入れ替わっている箇所がみられる。

・さる孝の心の子にて——さる孝の子の心にて(九五頁2行)

・万の人愛げうし給ふ——よろつの人けうじめてたまふ(一一三頁4行)

・草木の色ことに成行を——木草のいろことになりゆくを(二三頁9行)

「草木／木草」については、曾田文雄氏¹⁾に論考があり、本文異同の様

相から、物語全体に一例しか「木草」がみられず、「木草」は「草木」の誤写ではないかと指摘されている。その一例は忠こそ巻にあるが、柏亭本の該当箇所は「木草」とあり、異同はみられない。

次に、文脈上意味が異なるものをとりあげる。

・ふとくらにのせて飛にとびて——ふとくびにのせてとひにとびて(四頁6行) ※『うつほ全』「首」。直前に「くら置たる青き馬」とあるので、「くら」の方が自然か。

・此音を尋る事——この山をたづぬること(七頁7行)

・此木のかみしも上の品は大福徳の木也——この木の上下しものしなをば大福徳の木なり(一一頁11行)

・くらくなれば、入にし方もみえず——うちぐらなれば、入にしかたも見えず(三九頁6行) ※「暗くなれば」「内暗なれば」。

・只今さしもいたづら人に成べくてなん——たゞまさらもいたづら人になりぬべくてなむ(四七頁3行) ※『うつほ全』「忠雅」。

最後の例について、「忠雅」の実名表記は他に七例存し、次にみえるのが内侍のかみ巻において尚侍宣旨に署名する場面であり、残りは蔵開上巻・圍護下巻中である。それ以前では兄の名もしくは官位名で呼ばれるのが普通で、ここに実名表記があるのは少々不審である。ただ「兼雅」の実名表記(二例)が存するので確かなことはいえない。

次に誤写があると考えられる箇所について指摘する。まず、『宇津保物語本文と索引・本文編』の傍注や『うつほ物語 全』によって、前田家本に誤写があるとされる部分が柏亭本において正しく記

されていると考えられる箇所を指摘する。

・あか仏の御ゆかりには——あるほとけの御ゆかりには（五四頁1行）

・木のうつほにおや子籠りて——木のうつほにおやこもりて（七四頁4行）

・何人におはすらん——なにひとにおはらむ（九〇頁10行）

・代々のつゐてとして——代々のつはてとして（一〇二頁4行）

・つきく—toそ——つれく—toそ（二〇頁5行）

このような箇所は四九例みとめられた。反対に、柏亭本の方が誤りの可能性のある箇所は次の五例である。

・あれは人にもあらぬ心ちして——あれか人にもあらぬ心ちして（四五頁9行）

・其折の事習し出つ——そのおりの事のみなしいてつ（五五頁8行） ※「皆」の誤りか。

・天にもつか地にもつかず——そらにもつかず地にもつかず（七頁3行）

・事はさるよのいちなれば——琴はさるよのいちなれば（一〇二頁11行）

・成忠朝臣何事にもすくれ——なかつたのしうなにごともすくれ（一〇四頁9行） ※「侍従」の誤りか。

不審箇所も多々あり、まだ検討が必要であるが、柏亭本の方が比較的誤写が少ないように思われる。誤写の可能性については個々に偵

重な検討を要するので確定は難しいが、前田家本で解釈し得ない語句が柏亭本によって解釈可能になる場合もあることを指摘しておく。最後に、前田家本「うつほ物語」において解決されていない「ほに」という語句について、該当箇所の異同を示す。

・俊蔭思ふに、こゝら四の隅四のおもてを——としかけ思ふほに、こゝらよつのすみよつのおもてを（五頁10行）

・父が思ふやう、今はわかむすめ——ちゝかおもふほに、いまは

我女（二六頁10行）

・母の御もとに行て云やう「外にいさ給へ——はゝの御もとにゆきていふやうほにいさたまへ（六八頁7行）

・母の思ふやう、我おやは此二の琴をは——はゝのおもふほに、わかおやはこのふたつことをは（七五頁1行）

柏亭本には「ほに」という語句は一例もみられない。前田家本の「ほに」については、原田芳起氏が「は」の誤写である可能性を指摘しておられるが、柏亭本をみる限りでは「は」は導き出せない。今後の課題としたい。

二 人物名について——「俊蔭」の表記をめぐって

吉山氏は前掲の調査報告の中で、柏亭本における人物名について少し触れられている。参考として以下に引用させていただく。

主人公仲忠の名が「成忠」〔前田家本は「なかつた」となっている。また、俊蔭の才を試みる出題者の姓が柏亭本では「みはら」〔前

田家本では「なりとみ」、文化三年補刻本は「なかとみ」となっている。この「成忠」「みはら」と云う本文は、ともに浜田本系統の本文に一致している(西村宗一・笹淵友一氏「校本うつほ物語」・俊蔭卷」による)。

今回あらたに取り上げるのは、俊蔭卷の前半部における主人公、俊蔭の表記についてである。俊蔭は、現在では「俊蔭」と漢字表記されるのが普通である。しかし、前田家本における表記をみると、俊蔭卷の六十例すべてが「としかけ」とかな表記になっており、前田家本から漢字を導き出すことはできない。しかし、柏亭本の表記をみると、「俊蔭」五六例、「俊かけ」一例、「としかけ」三例となっており、「俊蔭」の漢字表記が定着していることがわかる。では、他の伝本においてはどうか。「校本うつほ物語」で漢字表記をあたってみると「年影」「俊蔭」「俊景」の三通りみられた。「年影」と表記しているものは、木活字本系統の木活字本第二種(二六六例)・奈良絵本(一例)・宇津保物語絵巻(四十例)および清水浜臣本系統の平頼本(一例)である。「俊蔭」と表記しているものは、浜田本系統の無窮会本(五五例)・榊原芳桢本(二例)・猪苗代兼寿本(二例)・出石本(四例)・村井敬義本(一例)・万治三年刊本(一例)である。また「俊景」と表記しているものは、岡本文庫本(一例)である。以上により、柏亭本は俊蔭の表記に關しては浜田本系統に属し、吉山氏が關係を指摘しておられる無窮会本とも近いと考えられる。

三 秘琴の名について——「くかせ」か「くふ」か——

『うつほ物語』において解決されていない問題点の一つに、十二の秘琴の名前に付けられている「く風」の読み方がある。室城秀之氏は前掲の論文において、前田家本の秘琴の名の表記に言及しておられ、それによると「くふ」と表記する例は、すべて「楼の上・下」の巻にだけ見られる現象であり、秘琴の名の表記に關しては、まだ充分に解明されていないと結んでおられる。ここでは、解決の大きな糸口にはならないかもしれないが、参考として柏亭本における秘琴の名の表記について記す。

- ・なむかせ (三例)
- ・はしかせ (一例) / はし風 (一例)
- ・りうかく (二例) / りうかく風 (二例)
- ・ほそをかせ (二例) / ほそを (一例)
- ・やともりかせ (一例) / やともり風 (一例)
- ・山もりかせ (二例)
- ・せたかせ (一例) / せた風 (四例)
- ・花その風 (二例)
- ・かたち風 (二例)
- ・都風 (二例)
- ・あはれ風 (一例)
- ・おりめ風 (二例)

柏亭本においては、俊蔭巻に限ると「くふ」のかな表記はみられず、「くかせ」のみである。しかし漢字表記の「く風」の読み方が分からないので軽々にはいえない。漢字とかなの書き分けにも統一性がみられない。以降の巻において注目していきたい。

四 和歌について——『風葉和歌集』との関わり

『うつほ物語』の和歌には『風葉和歌集』に存するものも多い。そこで柏亭本と前田家本との異同箇所を、『風葉和歌集』中の和歌と対照させ、傾向を探ることにした。

俊蔭巻の和歌一九首中、『風葉和歌集』に採られているのは六首である。そのうち一首は、柏亭本、前田家本、『風葉和歌集』いずれも異同が認められない(第一三番)。また、柏亭本と前田家本との間には異同がないが『風葉和歌集』中の和歌とは語句が異なるものが二首認められる(第一番・第一六番)。そして、柏亭本と前田家本との間に異同があり、かつ『風葉和歌集』がどちらかのもとの一致するものが三首認められる(第二番・第四番・第一八番)。ここで問題になるのが最後の場合である。次にその三首について、『風葉和歌集』・柏亭本・前田家本の順に挙げる。『風葉和歌集』の本文は『増訂 校本風葉和歌集』(中野莊次・藤井隆著 昭45 友山文庫)を用いた。なお今回問題になる箇所については、『風葉和歌集』内部での異同は認められなかった。

○第二番歌(『風葉集』第二四五番歌)

「風」 ふう 風のまねくなるべし花薄われよぶ人の袖とみつるは
「柏」 吹風のまねくなるへし花薄我よふ人の袖と見つるは
「前」 吹かせのまねくなるへし花すきわがよふ人の袖と見つるは

○第四番歌(『風葉集』第二九二番歌)

「風」 むしだにもあまた声せぬ浅ちふに独すむらん人をこそ思へ
「柏」 むしたにもあまた声せぬ浅ちふに独住らん人を社思へ
「前」 むしたにもあまた声せぬあさちふにひとりすむらん人を
こゝろ思へ

○第一八番歌(『風葉集』第一二三七番歌)

「風」 みな人をうつむもみちのかからぬは風ふくまつとおもふなるべし
「柏」 皆人をうつむ紅葉のかゝらぬは風吹松とおもふなるへし
「前」 みな人をうつむもみちのかゝらぬも風ふく松と思ふなるへし

第二番歌は柏亭本の「我」の読み方が分からないため判断できないが、残りの二首については柏亭本の語句と『風葉和歌集』の語句とが一致する。柏亭本と前田家本との間には、六首中この三首のみ異同が存することから、異同部分はすべて柏亭本と『風葉和歌集』との一致が認められる。異同箇所が少ないため確かなことはいえないが、俊蔭巻の和歌に関しては、前田家本よりも柏亭本の方が、より古形を残している可能性があるといえる。

おわりに

以上、柏亭本について、書誌および前田家本との異同を中心に調査報告を記したが、紙面の都合で俊蔭巻に限り、用例も一部を掲載するにとどまった。問題点も多数残しており、今後他の巻の調査も進めて、機会があれば稿を重ねたいと思う。

『うつほ物語』の本文は乱れた部分が多く存しており、まだまだ読みにくい物語であるとされている。今回の柏亭本の調査報告が、今後の本文研究の上で少しでも参考になれば幸いである。

〔注〕

- (1) 「宇津保物語に関する展覧書目録(附解説)」(日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅱ』(昭49 有精堂)所収)。
- (2) 「広島大学蔵『うつほ物語』(柏亭本)について」(『古代中世国文学』第二号 昭54・9)
- (3) 柏亭真直およびその自筆本については、稲賀敏二先生の新潮日本古典集成『落窪物語』(昭52 新潮社)の解説を参照。
- (4) 無窮会本(無窮会文庫蔵・写本二十冊)については、片寄正義氏による「宇津保物語伝本考」(『国語・国文』第七卷第二号 昭12・2)、『校本うつほ物語 俊蔭巻』(西村宗一・笹淵友一校 昭15 興文社)の笹淵氏による解説、吉田幸一氏による「宇津保物語の諸本」(『宇津保物語新論』宇津保物語研

究会編 昭33 古典文庫)に紹介されており、吉山氏の論文において柏亭本との本文の類似が指摘されている。

- (5) 宮内庁書陵部蔵、写本二十冊。
 - (6) 「前田家本『うつほ物語』はどのような本か」(『物語研究会会報』第二八号 平9・8)。
 - (7) 室城氏は(一)行型を一九首、(二)行連続型を一首としておられるが、俊蔭巻における和歌は全一九首なので不審。
 - (8) 前田家本の本文は『宇津保物語本文と索引・本文編』(宇津保物語研究会編 昭48 笠間書院)による。
 - (9) 『うつほ物語 全』(室城秀之校注 平7 おうふう)。以下、『うつほ全』と略す。
 - (10) 「マ行音バ行音交替現象の傾向」(『国語学研究』第五号 昭40・8)。
 - (11) 『宇津保物語本文と索引・索引編』(宇津保物語研究会編 昭50 笠間書院)参照。
 - (12) 『平安時代語新論』(築島裕著 昭44 東京大学出版会)、『国語学研究事典』(佐藤喜代治編 昭52 明治書院)参照。
 - (13) 「きくさ」と「くさき」——『宇津保物語』の本文批評——(『文教国文学』第一六号 昭60・1)。
 - (14) 「宇津保物語の言語と文体(二)」——語の認定と本文批判——(『平安文学研究』第三六輯 昭41・6)。
- いかわ・ゆうこ、広島大学大学院博士課程前期在学——